

## 1. [子育て支援について]

木次町会場（チェリヴァホール）

Q9：認定こども園（木次こども園）について、既存の保育所と近くにある幼稚園を有効活用するということだが、認定こども園という言葉は始めて聞いた言葉だが、保育所が0～2才の幼児期における集団だが、そのありように課題があるような気がする。従来は0～5才までの集団活動だったので、集団としての有効な効果が期待できる部分があったと思うが、2歳から見れば上がいないという状況である。せっかくスタートしたばかりだが、やはり近い将来的には加茂の幼保園のようにひとつの施設の中でやる必要があるのではないか。雲南市の中でそうした方向を見ておられるか？また、アンケートは入所者の保護者に限定する必要はなく、子育て世代全般に広く対象とすべきではないか。現在の認定こども園という体制は不自然に感じる。

A：木次保育所はこれまで0～5才児がいたが、今年の4月からは0～2才児だけになった。現体制は始めたばかりで十分ではないところもあるが、異なる年齢の子どもが交流する機会をできるだけ持てるよう取り組んでいる。今後もそれを進めていきたい。

木次こども園もひとつの施設が望ましいというご意見をいただいた。2施設は10m程の距離だが、保護者からも雨が降ったとき両方へ連れて行くのに不便という意見もいただいている。そういう点では1つが望ましい。ただ、今のところ新たに1つの施設にするという計画はない。木次保育所は昭和59年建設で29年経過しており、市内9つの公立保育所の中で一番古い。近い将来とは言えないが、そういう機会の時には検討していかなければならない課題である。

子育て家庭のアンケートについては、国において平成27年度から新たな子育て支援制度が作られ、今年度と来年度で「子ども・子育て支援事業計画」を全市町村で策定することになっており、今年度は子育て家庭に対しアンケートを行い、保育に対するニーズとか、生活実態の調査等を実施する予定である。周辺部にお住まいの方と連坦地にお住まいの方でニーズが違うため、市内1本ではなく町単位など区域を分けてアンケートを実施し、子育て家庭の保育に対するニーズを把握していきたい。（健康福祉部長）

Q10：この子育て支援は人口増加という目的があると思うが、少しPRが足りない。雲南市はこんなに良いですよ、ということをもっと他に分かるようにする必要がある。今日の資料に子育て関連支援助成事業一覧があるが、例えば医療費は他の市町村より良いですよとPRし、雲南に住もうという気持ちが強く持てるように、或いは住んでいる人がありがたいところだと分かるようにもっとPRしたらどうか。私だけでなく他の皆さんも分かりにくいという意見があった。

A：PR不足の面は確かに否めない。今後より一層PRしていきたい。他の市町村では一点集中主義で進めるというところもあるが、雲南市としては様々な子育て支援策を満遍なく充実させていくということで進めている。何か1つが県内一番というものはなくても、全体的には県内1、2番目だと言えるように進めていきたい。（健康福祉部長）

Q11：先般プラチナ構想ネットワークシンポジウムが開催された。15年後には人口が27,000人になるだろうという報告があった。そこで次男・三男が地元に戻ってこられる条件作りをすべき。それと、今子どもは2人しかいないが、3人目をつくろうという気持ちになるような条件づくり。まわりには出雲市や松江市があるが、そこよりも条件が良くなれば雲南市に住んでみたいと思うようになる。次男・三男がなぜ雲南市に戻らないかということを考えてみたとき、職場が無いということがある。職場がないなら、職場を作っていけばいい。田舎にいても企業を興すことは可能。夢発見プログラムも行っておられるが、ふるさとに戻ってこれるような条件と、ふるさとに帰ってきたいと思う気持ちを生む教育が大事。以前ドイツの青年をホームステイしたことがある。彼の出身地もドイツの田舎だった。たまたま交換留学生で来ていたのだが、自分のふるさとに近い条件でということ、ホームステイ先がこの木次町になったそうである。彼は次男だったのだが、自分もふるさ

とに帰ると言っていた。次男でも、ふるさとへ帰るという気持ち、それが教育だと思う。何故かというと、教育には10年、20年先を見据えた長いスパンが必要。戻ってこようという気持ちにさせる教育が必要だと思う。したがってドイツの過疎は日本ほど深刻ではない状態だ。雲南市の人口が維持していけるような将来を見据えたものを、子育て支援もいいが、そういった夢みたいなことばかりでなく将来を見据えたものを、長いスパンで考え行政が先導的に引っ張りながら子育て環境整備をしてほしい。現在空洞化が進んでいる。周辺部の方でも、このあたりに出てきたいという声はある。何故かかというと、老老介護をせざるを得ない状況が生まれているということ。先般、自治会長さん方と会議をした。すると自治会長の中に「もう自治会の役員をやめたい。市からの情報も要らないから。」と言われた方がいた。これが現実である。そうした中で、10年先、20年先を見据えた施策が求められているのではないかと思う。将来を見据えた、子どもを生き育てやすい環境づくりを、次男・三男が帰ってきやすい条件づくりが求められているような気がするので、参考意見としていただければ。

A：貴重なご意見を頂戴した。しっかりと受け止めたい。そうした思いは行政にかかわる我々も共有していく。雲南市がスタートして8年が経過した。どういうまちづくりを行っていくか。みんなで合併前から協議して、笑顔あふれる地域の絆、世代がふれあう家族の暮らし、美しい農山村の風景、多彩な歴史遺産、新鮮で安全な食と農、この5つの恵みを生かそうと気がついてまちづくりに取り掛かった。田舎ならどこにでもあるじゃないと言われるが、そういった恵みに気づくかどうかで大きく違う。この5つの恵みに気がついて、それでは具体的にどうしたらいいのかということで、雲南ブランド化プロジェクトを進め、5つの恵みに磨きを掛け、人・歴史・自然・食の4つをブランドにし、これらを生かす様々な施策を展開してきた。その結果、市民と他所から来られる人に「幸運なんです雲南です」と言えるように施策を展開してきた。まさに先ほどおっしゃられたことを様々な視点から取り組んできた。ご指摘をありがたく受け止めて様々な施策に生かしていきたい。  
(市長)